アルジェリアのイスラーム急進派後退の背景

私市正年（上智大学）

はじめに

2011 年アラブ政変後、真っ先に次の政変を予想されたのがアルジェリアであったが、実際にはアルジェリアは波風の立たないもっとも安定したアラブの国であった。その時、アルジェリア人の間で盛んに言われた言葉が「デジャ・ヴュ」（既視感のあること）であった。彼らにとって、アラブ政変の光景は、まるでアルジェリアで 1988 年に起こった「10 月暴動」のビデオテープのように見えたのである。

今日、アルジェリアの「武装イスラーム集団（Groupe Islamique Arm : GIA）」から生まれた「イスラーム・マグリブのアルカーイダ（Al Qaida au Maghreb Islamique: AQMI）」はサハラ・サーヘル地域ではなお、一定の勢力を保ってはいるが、アルジェリア国内では目立った動きをみせない。いわゆる「イスラーム国（Islamic States : IS）」の活動もほとんどみられず、シリアへの義勇兵の数も極端に少ない（表１）。その意味では、アルジェリアのテロリズムは弱まったといえる（表１）。アルジェリアの例は、テロリズム沈静化に向けた一つの道を示している。

従って、本論で問題にすることは、2011 年のアラブ政変と 1988 年のアルジェリア 10 月暴動の比較ではない。そうではなく、「10 月暴動」の後、束の間の民主化をはさんだ 1990 年代の暗黒のテロリズムの時代が、今日のアルジェリアのイスラーム急進派の後退に決定的な影響をもたらしているのではないか、ということを検討することが本論の目的である。

表 1 アルジェリアのテロ犠牲者数（死亡者）

年	1994	1995	1996	1997	1998	1999	2000	2001	2002
人数	6,388	8,086	5,121	5,878	3,058	1,273	1,573	1,130	910
年	2011	2012	2013	2014	2015				
人数	152	89	100	36	27				

出所：Lies Boukra, *Algérie la terreur sacré* (Lausanne, Edition Favre, 2002), p.250, p.264, 在アルジェリア日本大使館情報、および藤原聖也・在アルジェリア日本国大使の配布資料（2016 年 10 月 24 日、在東京アルジェリア大使館にて報告）より作成。

表 2 シリアへのジハーディスト人数

国	ムスリム人口	ジハーディスト人数	人口に対する割合
チュニジア	10,349,000	約 3,000 人	0.03
サウディアラビア	25.483,000	約 2,500 人	0.01
モロッコ	32,381,000	約 1,500 人	0.005
アルジェリア	34,780,000	約 200 人	0.000575

出所：National Governments, Pew Research Center, CNN Reporting, 2014/9/30 （accessed on March 30, 2016）

１．1988 年暴動

1988 年 10 月、アルジェリアは 1962 年の独立後、最大の暴動に遭遇した。「民族解放戦線（Front de Libération Nationale: FLN）」を軸とした特権的軍事支配体制の犠牲となり、マージナル化され、貧困に苦しむ都市青年層が街頭を占拠した。この時から、彼らはアルジェリアの政治変動において重要な役割を果たすことになる。エジプトやパレスチナにおいてと同様に、アルジェリアでも政治変革のうねりは植民地体制を知らない世代の中から巻き起こった。人口爆発は農民の子供たちを都市へと押し出し、不安定な都市生活者を大量に生み出した。彼らは学校教育の大衆化を経験した最初の世代であるが、卒業免状を受け取ってもそれが就職に何も役に立たないことを知ってフラストレーションを募らせた巨大な若者集団でもあった。1989 年当時、アルジェリアの人口 2400 万の 40%が 15 歳以下であり、都市人口は 50%を越え、出生率は年 3.1%に達していた。公式の失業率は 18.1%であったが、実際はそれよりもはるかに高かった[1]。

困窮化した都市の若者たちは「ヒッティスト（hittistes）」とよばれた。アラビア語アルジェリア方言で「壁」を意味する「ヒート」に、フランス語の語尾「イスト」がついた語彙で、仕事がなく一日中壁に背をもたれている青年たちを意味している。万民に仕事を与えるはずの社会主義が彼らに与えた仕事は壁にもたれることであったという、政治社会批判の意味もこめられている。

1988 年の「10 月暴動[2]」は、80 年代末のアルジェリア経済の不健全な状況をも物語っている。すなわち、石油・天然ガスが輸出総額の 95%を占め、国家予算に占める割合が 60%を越えていた。アフマド・ベン・ベラ大統領（Ahmed Ben Bella、在位 1962-65、ただし 1962-63 は首相位）とウアリ・ブーメディエン大統領（Houari Boumediene、在位 1965-78）の両時代に、アルジェリアはいわば「石油民主主義体制」を形成していた。権力は石油収入を輸入された消費財の補助金にあて、その代わりに大衆の政治批判を抑えることによって、社会的安定を保つことができた。体制はソビエト連邦にならって独立戦争の英雄たる FLN の一党制をしき、あらゆる体制批判を禁止していた。

ブーメディエン大統領は、1976 年憲法を制定し、自ら FLN 代表、国家の長、軍の長を

兼ねることになった。この「三位一体体制」は、軍を中心とした、FLN 幹部、高級官僚、国営企業体の管理者などからなるカースト的利権集団の確立を意味していた。この構造の特徴は、利権あさり、国庫の横領、汚職、密輸、縁故主義、凡愚政治、責任意識の欠落などからなり、それはシャーズィリー・ベンジェディド大統領（Chadli Bendjed、在位 1979-1992 年）の時代にはますます拡大していった[3]。こうした現象に対する社会的批判や不満はしだいに大きくなっていった。

社会主義、補助金、抑圧、FLN 一党制からなる支配構造は、本質的に石油価格の高値維持という不安定な経済基盤に支えられていた。1986 年の石油価格の暴落[4]は国家予算を半減させ、この構造を不安定化させた。加えて人口爆発によって、食糧だけでなく、住宅、学校、雇用などの不足が深刻化した。計画経済は機能不全となり、政治権力者の腐敗が表面化し、トラベンディスト（非合法の街頭の物売り）の姿が目立つようになった。とくに住宅建築は需要に比して供給の遅れがひどく、劣悪な雑居状況が社会不安を醸成していった。

「10 月暴動」はこうした社会情勢の悪化の中で起こったのである[5]。1988 年 10 月 4 日の夕刻、アルジェのバーブ・アル・ワード地区の子供や青年たちが、食糧や生活必需品の不足と物価高騰に抗議して大声を上げながらデモを始めた。車、店の窓ガラス、政府の建物が壊される事件もあったが、そのまま沈静化した。翌 5 日に抗議運動は暴動へと変わり、アルジェリア全土の主要都市で、窮乏した青年たちが、政府の建物、FLN の事務所、国営スーパー、夜間金庫、食糧雑貨店、豪華な車、アルジェ航空のオフィス、バス、道路の信号などを破壊し、またアルジェの丘の上のリヤード・アル・ファトゥフにある商業文化センターの複合施設（富裕な若者たちの憩いの場所としてシンボリックな意味をもつ）を襲撃した。暴動は 12 日まで続いたが、軍と警察による徹底的な弾圧に合い、死者は 400 人以上、逮捕者は数千人に上った[6]。「人民の軍」が人民に銃口を向けたのである[7]。

暴動は自然発生的であり、社会的怒りと権力のイデオロギーを愚弄する、という意図が色濃く出ていた。リヤード・アル・ファトゥフの近くでアルジェリア国旗が下ろされ、代わりに空っぽのクスクスの粉袋が掲げられた光景がそれを如実に物語っている。「10 月暴動」は、社会変革の立役者として窮乏した都市青年層を登場させた。軽蔑されたヒッティストたちはこうして街頭を支配し、体制を土台から揺さぶり始めた。

しかしながら、暴動は組織化された政治運動へと直結していかなかった。暴動は既存の政治的、経済的システムに対する拒否ではあったが、窮乏した都市青年たちは必ずしも確たる政治的要求を掲げてはいなかった。自由やデモクラシーの叫びは時としてあげられたが、大多数のデモ参加者たちは、何よりも国家や政治経済の指導者たちに対する怒りを表

現したのであった[8]。権力が掲げてきた社会主義のイデオロギーは信頼を失っており、社会主義勢力が暴動のエネルギーを引き継ぐことは困難であった。その反対に、イスラミスト（イスラーム主義者）の運動はこの社会的蜂起を勢力拡大の絶好の機会ととらえた。1988 年の暴動の後、イスラミストの説教師の周囲には都市の窮乏化した青年たちが結集し、高潮のような大衆運動が起こり始めていた。

２．FIS の結成と大衆動員

「10 月暴動」から「イスラーム救国戦線（Front Islamique du Salut: FIS）」登場までの過程はシナリオのない、先の見えない展開であった。アルジェでは政府内部での抗争や体制を揺さぶるグループなどの動きが噂された。また、動機が何であれ、暴動は都市の青年大衆の間に即座に広がった。首都での大規模な略奪に対し、イスラミストの説教師たちは政治的危機との認識のもとに集まった。かつてのウラマー協会のメンバーで体制に非妥協的姿勢をとるサフヌーン（Sahnun Ahmad、81 歳の説教師）は 10 月 6 日の夜、「平静を取り戻すように」との呼びかけをしたが、効果がなかった。しかし、これが契機となってイスラミスト知識人が権力と反乱する社会との仲介役をはたすようになった。10 月 10 日、ベルクール地区のカーブル・モスク（正式名称はサラーフ・アッディーン・アイユービー・モスクであるが、旧アフガン義勇兵たちが集まる場所であったので、呼ばれるようになった通称）から出発したアリー・ベンハーッジュ（Ali Benhajj、1956 年生の元中学校教師。巧みな弁舌でイスラーム急進派のカリスマ的指導者になった。）率いるデモ隊は 2 万人にふくれあがった。デモに対して軍が発砲したため、逃げ惑う人びとでパニックとなり、数十人の死者が出た。ベンハーッジュは都市の窮乏青年を代弁して大衆の願いを伝えるアピールを行った。イスラミスト知識人と大衆との結合はこの数ヵ月後の 1989 年 3 月、FIS の結成によって実現することになる。

10 月 10 日の夜、シャーズィリー大統領はサフヌーン、ベンハーッジュ、マフフーズ・ナフナーフ（Mahfoudh Nahna、アルジェリアにおけるムスリム同胞団代表）を召集し、政治、経済改革案を発表した。暴動が終わった後、シャーズィリー大統領は数人の責任者を解任した。1989 年 12 月、彼は唯一の大統領候補者として再選され、そして翌 89 年 2 月、一党制に終止符を打つ憲法改正案が国民投票によって採択された。3 月 4 日、軍が公式に FLN 中央委員から退いた[9]。シャーズィリーの頭には、多数の政党の対立を巧みに操り、FLN に加えてイスラミストの支持をえれば、従来の強力な大統領位を維持できるとの考えがあった。ところが現実には、この改革はアルジェリアを危機に陥れ、さらに内戦へと導くことになる。

1989 年 3 月 10 日、FIS の結成がアルジェ・クッバ街区のイブン・バーディース・モスクで宣言された。創設メンバーは 15 人であった。

FIS の成功の要因は、イランのホメイニー革命と同様に、イスラミストのインテリが大衆動員のイデオロギーを精力的に生み出すことによって、都市の窮乏した青年層と敬虔な都市商人・小企業家たちを結集させることができ、ついには FLN の言説の欺瞞性を暴いたことにある。FIS の勢いは、最初の衝撃的な成功――1990 年 6 月の地方選挙の勝利――から 1991 年 5～6 月の「蜂起のゼネスト〉までは党の二頭体制が有効に機能していた[10]。すなわち、一人は中学校教師で、かつてのブー・ヤアリー（Bou Yali）の同志であり、体制に対するジハード実行部隊の一人であったアリー・ベンハーッジュである。彼は 1989 年当時 33 歳で、バイクに乗って各地を移動し、大衆への説教を行った。古典アラビア語とアルジェリア方言の両方を使いながら、類まれな弁論術でヒッティストに深い感動を与えた。もう一人は、ベンハーッジュよりも 25 歳以上も年上の巧妙な政治家アッバースィー・マダニー（Abbasi Madani、1931 年生）である。FLN の旧党員で大学教師のマダニーは、サウディアラビア王家から贈られたと噂されたベンツの高級車を好み、小売店や商人たちを訪れ、また「戦闘的企業家たち」[11]にも接触した。マダニーは、私的セクターの強化と国家管理の抑制という経済自由主義を説くことで、商人や小企業家たちに商売の明るい展望を示し、彼らを FIS の中に取り込んだ[12]。しかし、この影響は、体制が 1991 年 6 月のゼネスト失敗後に FIS の弾圧を開始するや、FIS に逆作用となっておよぶようになる。すなわち、商人や小企業家たちは、FIS の政策と党内部の力のバランスの変化に不安を覚え、またベンハーッジュ派メンバーたちの演説の過激化を恐れるようになった。というのも商人や小企業家たちは、ベンハーッジュ派メンバーたちの背後にいるヒッティストが社会的復讐心を抱き、それが自分たちに向かうことをひどく恐れるようになったからである。イランにおいてはホメイニーが唯一の指導者としてバーザールの不遇な商人たちの支持を最後まで保ち続けることができたが、アルジェリアではすでにゼネスト失敗後に FIS の両頭体制はかなり不安定になっていた。アルジェリアのイスラーム主義運動は都市の窮乏青年と敬虔な商人・小企業家層を一緒に支持者として抱えこむことができなかった。1992 年以降の内戦時の GIA と AIS の間の分裂は、この FIS の両頭体制の失敗を示しているのである。

FIS は 1989 年 9 月に合法化されるとすぐに、連続したデモ行進による体制への圧力をかけた。10 月、機関誌『アル・ムンキズ（al-Munqidh、救済者）』（月 2 回刊行、発行部数 20 万部）が発行されたが、この中で早くも体制との妥協の困難さを予知させる要求、すなわち拘留されているブー・ヤアリー派元メンバーの釈放を要求した。10 月 29 日、アル

ジェの西方ティパサ県で大地震が起こった。国の救援体制が遅れたのに対し、FIS の救援体制はきわめて迅速で効果的であった。医者、看護婦、救助隊員が党の旗を掲げた救急車に乗って被災地にかけつけ、献身的に救助活動にあたった[13]。党結成から 1 ヶ月で、FIS が、弱体化し腐敗した国家に交替する準備を進め、大衆の心をとらえたことは確かであった。1990 年前半、FIS は国政選挙の実施の約束をとりつけるため、繰り返しデモと集会によって体制に圧力をかけた。

３．FIS の運動内部の亀裂と国政選挙の勝利

（１）FIS の運動内部の亀裂

1990 年 6 月 12 日、地方選挙が行われ、1,539 の市町村（コミューン）のうち、853 のコミューンで FIS 系議員が多数派を占め、FLN が優位を占めたコミューンは 487 に過ぎなかった[14]。都市の窮乏青年たちは進んで投票に出向き、FIS の候補者に投票した。商人・小企業家、公務員などの都市中間層も――宗教的に敬虔な者だけでなく、世俗主義志向の者までが――政治的、社会的改革を期待して FIS を支持した[15]。市町村長や議員になった者はイスラミストの知識人、とくに教師が多かったが、同時に敬虔な都市中間層も少なからず含まれていた。FLN 体制に批判的な商人や小企業家たちが政治に直接関与したのは、アルジェリア史上初めてのことであった。

1991 年 5 月末、翌月末に予定されていた総選挙の選挙区割案（FLN に有利な選挙区割となっていた）が公表されたとき、マダニーは政府に選挙区割案の撤回を要求するため、無期限ゼネストを呼びかけた。5 月 29 日、政府は FIS にアルジェ市内の広場の占拠を認めざるをえなくなった。彼らは 4 か所の広場で 1 週間にわたって座り込みの抗議を続けた。FLN と FIS の二重権力状況に終止符を打つために、ついに軍司令部が介入することになる。6 月 3 日の夕方、戒厳令が宣言され、戦車がデモ参加者を退散させ、軍が新しい首相スィド・アフマド・ゴザーリー（Sid Ahmad Ghozali）を任命し、彼によって国会議員選挙の 12 月延期が発表された。ベンハーッジュはそれに対して蜂起をよびかけ、またマダニーは、部隊が引き上げなければ、ジハードを開始すると脅した。しかし、政府軍が拠点に展開し、他方 FIS の指導部が反抗に躊躇している状況下では、こうした呼びかけも大衆蜂起へとつながらなかった。かくして行動の主導権は FIS から軍司令部へと移り、この後、軍が国家を直接的に統制していくことになる。6 月 30 日、ベンハーッジュとマダニーが内乱教唆の嫌疑で逮捕された。彼らはこの後の軍と FIS との衝突および内戦中も一貫して拘束されることになる[16]。

「蜂起のゼネスト」が残したものはイスラーム主義運動の内部の分裂と対立であった。

マダニーとベンハーッジュの両頭がいなくなり、代わって凡庸な中堅幹部が指導権をめぐって争うようになった。その中で、ブー・ヤアリー派の残党やアフガン・ゲリラ兵帰還者の周辺に集まった武装闘争派が、選挙による改革は欺瞞的であるとして拒否する意向を示し、テロ活動を画策していた。彼らの最初の行動は、タイイブ・アフガ―ニー（Tayyib Afghani）のグループによる 1991 年 11 月 29 日、アル・ワード地方ゲンマール軍駐屯所の襲撃事件であった。パキスタンのペシャーワルで「殉教」（1989 年 11 月 24 日）したアフガン・アルジェリア人の指導者アブドゥッラー・アッザーム（Abdullah Azzam）の殉教 2 周年にあわせて、この日が襲撃日として選ばれたのである。このテロ攻撃は、彼らがアフガニスタンで実践してきたジハードをアルジェリアの地に移すことであり、また既にブー・ヤアリーによって実行されていたが、フランスからの独立戦争の方法と伝統の再現を意味していた。

FIS は武装闘争を行う多様な小集団にはほとんど影響力を持っていなかった。武装闘争が次第に目立つようになると、マダニーが進めてきた政治的交渉路線にあきたらず、急進派へと移る離党者が増え始めたが、党はそれを黙認せざるをえず、逆に FIS の弱体化に乗じてその実権を奪取しようとする「ジャザーイリスト[17]」のエリートたちが多数入党してきた。1991 年 7 月 25～26 日、バトナ（コンスタンティーヌの南西 120ｋｍ）にて召集された党大会は、若いエンジニアでジャザーイリスト派のアブドゥルカーディル・ハシャーニー（Abdelkader Hacheni）を、党組織の指導と様々な思想グループ間の調整の責任者（臨時の党執行委員長）として認めた。6 月に逮捕されたマダニー、ベンハーッジュ、その他主要幹部が拘留されたままであり、ハシャーニーはマダニー路線の継承の意志表明をするとともに、党運営をジャザーイリスト中心に進めるようになった。

（２）軍によるクーデタと FIS の解体

アルジェリアにおけるテロリズムの悲劇の発端は 1992 年 1 月の軍によるクーデタにある。前年 12 月 26 日に実施された国政選挙（第 1 回投票）で全議席 430 の内、232 議席が確定、その内 188 議席を FIS が獲得し、権力を独占してきた FLN が獲得した議席はわずか 16 であった。第 1 回投票で議席の確定しなかった 198 議席については、第 2 回投票（翌 92 年 1 月 17 日に予定）で議席確定することになっていた。

12 月の選挙前、いくつかの世論調査は FIS の敗北、FLN の勝利を予想していただけに体制はひどく狼狽した。シャーズィリー大統領が FIS との連立政権を考えているとの情報は体制内守旧派をパニックに陥らせた。同時に世俗派新聞は第 2 回投票を中止させるため、軍事介入の世論づくりを始めた。たとえば『エル・ワタン（al-Wantan）』は 12 月 29 日付

で「第 2 回投票、NO！」という記事を掲載した。『アルジェ・レピュブリカン（Algier Republican）』や『ル・マタン（le Matin）』も同様のキャンペーンを始めた。決定的だったのは、1992 年 1 月 2 日、社会主義諸勢力戦線（Front des Forces Socialites: FES）が、同じくベルベル系住民を基盤とし、若い世代の世俗主義派知識人に支持された政党「文化と民主主義のための連合（Rassemblement pour la Culture et la Démocratie: RCD）」や社会主義勢力や女性人権団体に呼びかけて行った「原理主義国家にも反対、警察国家にも反対」というスローガンの 30 万人の大規模デモであった。防衛大臣ハーリド・ナッザール（Kharid al-Nazzar）によれば、このデモには権力による関与もあったという。ベルベル政党で世俗主義路線をとる FFS にとっては、イスラーム国家（アラブ性も志向）をめざす FIS 国家は自らの存在を危うくする脅威だったのであろう。だがこの後の悲劇の歴史を考えれば FFS のこのときの選択は誤っていたといわざるをえない。

かくて労働組合諸団体、市民団体、女性人権団体、学生組織などによって結成された「アルジェリア救済国民委員会（Conseil National de Sauvegarde de l'Algerie: CNSA）」は「共和国を救済するため」という理由で公然と軍の介入を要請した。軍は、最初から FIS 政権を認める意向はなかったので、これは渡りに船であった。従って、シャーズィリー大統領が FIS との連立構想の意向を示した時点で、彼の解任は決まっていたといえる。1992 年 1 月 11 日、大統領の辞任が発表された。大統領不在という緊急事態に対し、同日ゴザリ首相は自らを長とする「国家安全最高評議会（Haute Conseil de Securite: HCS）」を設立、選挙中断も発表した。HCS により、14 日ブーディヤーフを議長とする「国家最高委員会（Haute Comite d'Etat: HCE）」が設置された。これは 5 人のメンバーからなり、辞任したシャーズィリー大統領の任期が切れる 1993 年 12 月末まで（後に 1994 年 1 月 31 日まで延期）大統領権限を代行するものとされた。

４．ブーディヤーフ、アリー・カーフィー、ゼルワールの統治

ブーディヤーフは武装解放戦争を計画・実行した「9 人の歴史的英雄」の一人であったが、独立後 FLN 主流派と対立、1964 年頃国外に亡命し、主にモロッコで生活をしていた。すっかり忘れ去られていた人であり、彼の名を聞いて多くのアルジェリア人はぴんと来なかったと言われる。1 月 16 日、彼はモロッコより 28 年ぶりに祖国に戻り、HCE 議長に就任した。彼の演説を聞いた国民の評判はすこぶるよかった。誠実で信頼でき、堕落する前の FLN の姿を彼の中に見出したからである。

だが、ブーディヤーフがアルジェリア政治を指揮していくのは所詮無理であった。彼の命令で、イスラーム勢力の指導者が次々と逮捕され、FIS の非合法化（3 月 4 日）と解散

命令が出されたので、武力衝突は避けがたくなった。ブーディヤーフは FLN に対しては、腐敗・堕落の浄化と権力構造システムの改革（自らを国外追放に追いやったことに対する復讐でもある）をめざした。結局、彼は FIS と FLN の双方を敵に回したため、孤立無援となった。1992 年 6 月 29 日、アンナバの文化会館での演説中、彼の護衛についていた警備隊員ランバレク・ブーマアアラフィー（Lambarek Boumaarafi）が発砲し、ブーディヤーフを殺害した。会場には 56 人の大統領警備隊員がついていたが、誰も暗殺を防ぐことができなかった。暗殺がブーマアアラフィー単独によるものなのかどうか、不透明なまま捜査は打ち切られた。体制寄りのマスコミは、ブーマアアラフィーが犯行の前夜、ナイトクラブで酒を飲んで酔っぱらっていたらしいにもかかわらず、彼がイスラミストであったと主張した。しかし、世論の多くは暗殺の背後に権力の力が働いていたとみている。

後継の HCE 議長にはメンバーの一人、アリー・カーフィー（Ali Kafi）が就任した。彼も解放戦争の元大佐で「全国ムジャーヒディーン機構（Organisation Nationale des Moudjahidine）」代表の地位にあった。この頃から権力機構内部でも、イスラーム・バアス主義者、保守主義者とフランコフォン（フランス語話者）、モダニストの間での対立が噂されるようになり、アリー・カーフィーはイスラーム勢力の徹底的排除に反対し、彼らとの妥協を図ろうとしていた。1993 年 8 月 21 日、カスディ・メルバーフ（Kasdi Merbah）大佐がアルジェの東 25ｋｍアイン・タルヤ市内を車で走行中、襲撃され、息子、兄弟、運転手、ボディーガードもろとも暗殺された。彼は FIS 勢力との対話を模索するだけでなく、権力の腐敗・汚職にも批判的であった。彼の暗殺もまたイスラーム急進派 GIA の仕業とされ、真犯人は謎のままにされた。

HCE は結局、1994 年 1 月まで存続して解散した。その後、HCE メンバーのゼルワール（Zeroual Liamine）国防大臣が 3 年任期の国家主席（Président de l’Etat, 暫定の大統領格）に任命された。彼も解放戦争の兵士出身者で、独立後も人民軍の司令長官の要職を務めた。1994 年 5 月に、ゼルワールは、不在の国会に代わって、暫定国民議会（議員 200 名の任命制）を設置し、95 年 11 月には大統領選挙を実施して正式に大統領に就任、98 年に辞任するまでその地位にあった。この間に、1997 年 5 月には暫定国民の任期満了に伴い、6 月に国民議会選挙を実施した。ゼルワールの治世はもっとも激しいテロリズムの激しい嵐が吹き荒れた時代で、大規模虐殺、誘拐、暗殺、拷問、弾圧などが相次いで起こったが、テロ後のアルジェリア政治の展開から見るならば、着々と体制による政治再建が進められていたともいえる。

おわりに

FIS 組織が非合法化され、指導者たちが逮捕されると、組織自体の分裂を招き、政治の主導権を失っていった。その間にアルジェ都市郊外の庶民地区では多くの独立した武装小集団が生まれた。彼らの多くは都市の窮乏した青年たちであり、政治指導力や調整能力を欠き、ましてや政治プログラムを作成する力を持ち合わせていなかった。そうした諸集団が 1992 年 10 月、GIA を結成し、やがてテロリズムの主役の地位についた。彼らのテロのターゲットは、最初は政治家、軍人・警察など権力機構の人間たちであったが、やがて知識人・文化人（文化的に体制派）、外国人（政治経済的に体制を支える存在）をも攻撃対象としていった。そして彼らが軍や警察力によって次第に追い詰められると、一般市民をもテロの対象とした。彼らの論理は、「自分たちはイスラームの正義のために戦ってきた。神の正義の戦いは絶対的に正しいのに、劣勢に立たされるようになった原因は何か？市民がこの正義の戦いを放棄したからである。最大の責任は正義の戦いについてこなくなった市民にある」というものである。

1997 年に悲劇は頂点に達した。8 月 29 日ブリダ県スィディ・ムーサー市のライース（死者 228 人）、9 月 5 日アルジェ西郊ベニ・メッスース（死者 120 人）、9 月 22 日アルジェ南郊ベン・タルハ（死者 212 人）が血の海となった。さらに西部のギリザーン県の村では、97 年 12 月末（400 人）から翌 98 年 1 月（62 人、65 人の 2 回）というように凄惨な虐殺事件が起こった。一晩で多数の市民が虐殺されたのであった。
だが、ここに大きな謎が横たわっている。これ程の大量の人間を GIA が一晩でどうやって殺せるのか？大規模テロ事件の背後では、「正当防衛団（Les Groupes de Légitime Défense）」あるいは「愛国者たち（Les patriotes）」という体制側の民兵組織が GIA と武装闘争を始めており、また何よりもベン・タルハ事件の目撃者証言は、虐殺に軍や警察が関与したことをほのめかしている[18]。すべてのテロ事件がそうだとはいえないが、大規模な虐殺事件には何らかの国家の関与があったことを信じるアルジェリア人は多い。

虐殺の真相はどうであれ、軍・体制は、徹底的な治安対策によって人々を恐怖のどん底に落とし、社会的ネットワークを破壊した。体制側の人だけでなく、体制に批判的なリベラル派や穏健なイスラーム勢力も、体制による秩序回復を支持するようになった。彼らの関心は、政治よりも生活へと向かった。1990 年代のテロリズムの恐怖と体制による力ずくの秩序回復政策を通じて、アルジェリア社会は非政治化し、政治的動員力は弱体化した。かくして、アルジェリア人は、アラブ政変に反応せず、シリアへの義勇兵参加にも関心を向けなくなった。穏健派、急進派の双方とも、イスラームの組織的動員力は極端に弱まり、体制側も集会やデモに対しては厳しい対応で臨んだ。以上のように、アルジェリアのテロ

リズムの沈静化の背景には、社会の解体と非政治化、極限まで達したテロリズムと人々のテロリズムへの恐怖、治安体制の強化などが指摘できよう。

―注―

[1] 1985 年から 1991 年の間に失業者数は 190%増加した（Bradford, Dillman, "Transition to Democracy in Algeria", in *State and Society in Algeria*, J. P. Entelis and P.C. Naylor (eds.), Westview Press, Boulder, 1992, p.2）。また 1990 年にはアルジェエリアの労働可能人口（18～54 歳）の失業率は 35%～40%に達していたと推定されている（福田邦夫「イスラムの台頭と FLN の対応」『マグレブ』126 号、日本アルジェリア協会、1991 年、26 頁）。

[2] 10 月暴動から FIS の台頭、クーデタまでの経緯については、私市正年『北アフリカ・イスラーム主義運動の歴史』白水社、2004 年、231-253 頁を参照。

[3] Yefsah Abdelkader, "L'armée et le pouvoir en Algérie de 1962 à 1992", *Revue du Monde Musulman et de la Méditerranée*, vol.65(1993), pp.85-86. 政治や社会のなかのこうした特徴や現象は'Chadlism'と呼ばれるようになった。

[4] 1980 年の 1 バレルあたり 37.88 ドルが、1986 年は 1 バレルあたり 15.02 ドルに落ち込んだ。2000 年代に入ってから価格は上昇傾向となる。

[5] シャーズィリーの証言によれば、10 月暴動の背景には、シャーズィリー政府の進める改革を止めようとした FLN 保守派の意向があった。私市正年・渡邊祥子「シャーズィリー・ベンジャディード元アルジェリア大統領へのインタビュー―証言の歴史的重要性―」『上智アジア学』第 27 号、2009 年、280-281 頁。

[6]公式の死者数は 159 人。Cf. Jacques Fontaine, "Quartiers défavorisés et vote islamiste à Alger", *Revue du Monde Musulman et de la Méditerranée*, vol.65, 1993, p.141.

[7] アルジェリア人民国軍ＡＮＰは、憲法（1976 年）では、独立戦争を勝利に導いた人民の軍隊として位置付けられているが、それが大衆に向ったことで国民の信頼を完全に失うことになった。Pierre Robert Baduel, "*Éditorial* ", *Revue du Monde Musulman et de la Méditerranée*, vol.65(1993), p.16.

[8] Benchikh Madjid, "Les obstacles au processus de démocratisation en Algérie", *Revue du Monde Musulman et de la Méditerranée*, vol.65, 1993, pp.107-108.

[9]軍は公式の政治の舞台から退いたが、軍の治安部隊(la Sécurité militaire)は、そのまま政治権力者たちのために働き続けていた（Cf. Yefsaf, A., op.cit. p.87）。これは、軍が中央委員会からは退いても、FLN 政治局には残り、政治を監督していた、とみることもできる。

[10] Gilles Kepel, *Jihad:Expansion et declin de l'islamisme*, Paris, Gallimard, 2001, p.262.

[11]元警察官や役人で商売に手を出し、その経歴によって知りえた街頭トラベンディスト商人の縄張りを取り仕切っている人たち。Luis Martinez, *La guerre civile en Algérie*, Paris, Karthala, 1998, pp. 50-53.

[12] アルジェリアでは輸入品は政府の厳重な管理下に置かれ、各自治体の保税倉庫に配給され、小売店主は保税倉庫から公定価格で購入しなければならなかった。しかし実際には公定価格で輸入品を購入することは不可能で、保税倉庫を管理する役人から闇価格で購入していた。他方で闇価格で仕入れた輸入品は仕入れ価格にマージンを上乗せして販売することを禁じられていた。1989 年 7 月のシャーズィリー政府による価格統制システムの撤廃は工業製品のみで、生活必需品には適用されなかった。従って小売店や商人たちは FIS による市町村支配を歓迎したのである。

[13] サウディアラビアや湾岸諸国からの物的援助が FIS の活動にとって大きな力となった。

[14] Jacques Fntaine, " Quartiers défavorisés et vote islamiste à Alger", *Revue du Monde Musulman et de la Méditerranée*, vol.65, 1993, p.157; Rouzeik Fawzi, "Algérie 1990-93 : La démocratie confisquée ? ", *Revue du Monde Musulman et de la Méditerranée*, vol.65, 1993, pp.29-60.

[15] FIS の得票率が低かった（総投票数の 30%以下）地域はムザブ、大小カビール、サハラ地域、タルフ（チュニジア国境）などであった（Cf. Séverine Labat, *Les islamistes algériens*, Paris, Edition du Seuil,1995, pp.178-179, 311）。

[16]二人は、2003 年 7 月 2 日、12 年間の刑期を終えて釈放された。ただし、5 年間は公民権を剥奪されることになっている。

[17] アルジェリアという言葉に人を示すイストをつけた造語で、ムスリム同胞団員ナフナーフが皮肉をこ

めてつけた名前。アラビア語ではジャズアラとよばれた。一般に言われるイブン・バーディースやベン・ナビーとのイデオロギー的関係は必ずしも根拠はない。明確なイデオロギー的土台をもたないが、ナショナリズムとイスラーム主義の結合、アルジェリアに固有のイスラーム主義を主張し（イスラーム主義のナショナル化）、ムスリム同胞団のナフナーフが説く運動の国際化に反対したところに特徴がある。1970 年代初めに大学教員や宗教指導者たちがアルジェ大学本部で最初の会合を開いたのが起源。メンバーの多くが大学の理科系出身者で、本質的にフランコフォンのインテリ・エリート集団、テクノクラートである。トレムセン地方出身者が中核を形成。1990 年 11 月 12 日、ジャザーイリストは「文明建設のためのイスラーム連合（al-Jam‘īya al-islāmīya lil-binā’ al-ḥaḍarī）」を組織した。1990 年 6 月から FIS との共闘路線をとり始め、1991 年 7 月 25～26 日のバトナ会議から FIS に合流した（Cf. Labat,S., op.cit., pp.79-81）。アルジェリアのイスラーム主義思想の唱道者は歴史的にジャザーイリストたちであった、という見方もある（Cf.　Amine Touati, *Algérie-les islamistes à l’assaut du pouvoir*, Paris, L’Harmattan, 1995, pp.72）。

[18] Nesroulah Yous, *Qui a tué à Bentalha*?, Paris, La Découverte, 2000.